

# MARUMO LIGHTING NEWS



2004 MAY

VOL.90

- 舞台照明デザインの技法 アクティングエリアとライティング—— 中川 隆一
- ロックコンサートのステージライティング デザインの考え方と光の方向性—— 加藤 憲治

● 表紙写真=演劇企画集団THE ガジラ公演「KASANE-鶴屋南北「かさね」より」/写真撮影=青木 司



舞台照明デザインの技法

# アクティングエリアと ライティング

中川 隆一

新国立劇場公演「三人姉妹」を追放されしトゥーゼンパフの物語（写真撮影／青木 司）

## 照明デザインの仕事

舞台照明デザインの仕事は、具象的な表現、抽象的な表現にかかわらず光を使って舞台に絵を描いていくことですが、それと同時に空間の空気をデザインするという重要な役割があると私は考えています。

空間の空気をデザインするとは、芝居がおこなわれている舞台を明るくして役者の演技を見せるだけでなく、その空間の匂いや、質感、暖かさや冷たさといった肌触りなどを照明によって表現していくということです。私は、この空間の空気をデザインするということを考えながら、舞台照明のデザインに取り組んでいます。

ところで、実際の仕事では、スタッフ会議などの前に台本を読んで照明デザインを考えるという方法を、私はとっていません。スタッフからは、事前に台本を読まない照明家だといわれています。もちろん、台本の概要やストーリー程度は把握していますが、スタッフ会議の前の段階で、台本を深く読み込むようなことはしません。

作品に対する明かりのイメージなどは持たずにスタッフ会議に臨み、最初は演出家の考えや演出意図を理解することに努めます。そして、舞台美術家の美術プランが具体化し、舞台装置の模型ができあがってくるのを待ちます。

何度かのスタッフ会議を経て、できあがった舞台装置の模型を見る段階になると、すでに頭のなかでは照明デザインの半分くらいまではできあがっています。

台本からではなく、演出家や舞台美術家などのスタッフとの話し合いのなかから、照明デザインを立ち上げていく、これが私の仕事の進め方です。

こうした方法をとるのは、事前に台本を深読みして、こまかいところまで明かりを考えてしまっていると、それが演出家の意図や美術家の考えと異なっていた場合、考えていたことを崩してもう一度作り直さなければならなくなるからです。

ひとつの固定してしまったイメージを崩して、新たに作り直すのは大変なことです。

同じことは役者についてもいえます。

役者のなかにも台本をとてども丁寧に読み込んできて、稽古初日には台詞が全部入っている人がいます。演出家に、その役に対してのイメージがあるにも関わらず、役者の方で稽古の初日にすでに自分なりのイメージで役をつくっていたら、そのイメージを崩して演出家のイメージにつくり変えなければなりません。これは演出家にとっても、役者にとっても、大変な作業になるだろうと思います。

私の場合は、打ち合わせの段階で照明デザインを半分くらいまで考えますが、残りの半分をどうするかというと、稽古をみながら考えていくようにしています。

事前にイメージを固めていないので、稽古場では新鮮に、客観的にその作品を見ることができ、そこから自分の仕事に入っていくことができるように思います。

台本から生まれる自分のイメージにこだわるよりも、稽古に立ち合い、どのように芝居が形づくられていくのかを見ながら、最終的に照明デザインを固めていくのです。



## 役者の動きを把握する

稽古を見る時のポイントとして、役者の動きを把握することが挙げられます。

ここでは、照明デザインの技法のひとつとして「オートフォロー」という明かりのつくり方を紹介しますが、これはベースライトを分割してつくり、役者の立ち位置のベースライトを明るくし、役者がその場を離れるとベースライトを消していくというように、役者の動きに合わせてベースライトの明るさを変化させていくという手法です。この手法では、いかにきれいに明かりを動かしていくのが重要になるわけですが、役者の動きをこまかく把握していないと、こうした明かりをつくり出すことができません。

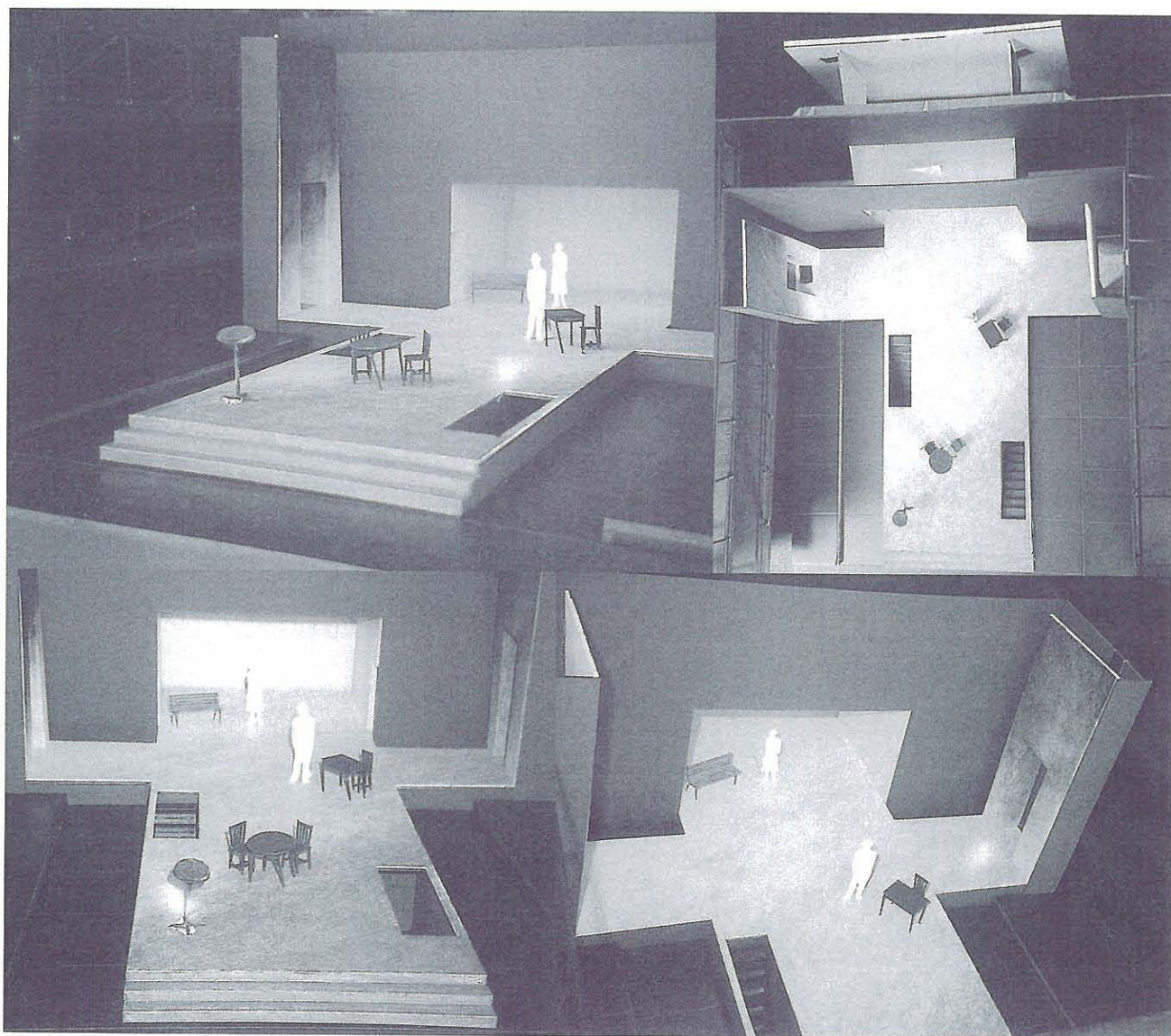
次のページの図1は、私が稽古場で使用していた台本です。稽古を見る時には、台本の余白に道具の平面

図を縮小コピーしたものを貼って準備をします。1ページに2枚くらいの縮小平面図を貼り付け、この平面図に稽古を見ながら、図2(p.4)のように役者の動きを描き込んでいきます。こうした方法を使って、役者の動きを全て把握していきます。

役者の動きが把握できると、その動きに合わせてベースライトを何分割でつくるかといった計算をすることができるようになります。

## ベースライトをつくる

作品の内容や演出家の考え、舞台美術、上演場所の条件、使用する照明設備や器具など、さまざまな要素によって照明デザインの考え方やつくり方も異なりますが、ここでは「オートフォロー」のためのベースライトのつくり方について具体的に紹介します。



『三人姉妹』を追放されしトゥーゼンバフの物語』の舞台装置模型。(舞台美術デザイン/島 次郎)  
正面だけでなく、さまざまな角度から模型を見ながらイメージをふくらませる。







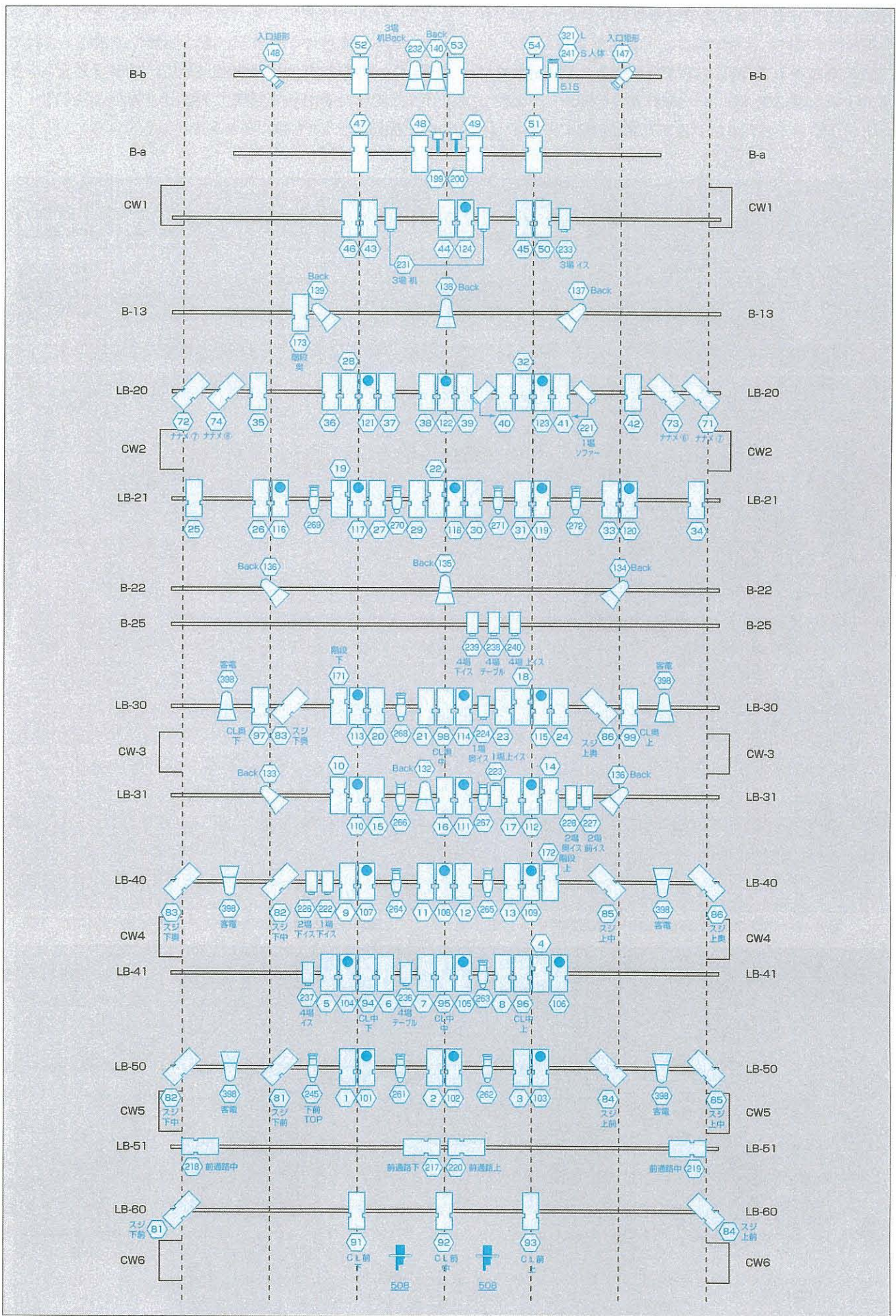


図3 「三人姉妹」を追放されしトゥーゼンバフの物語」の総合仕込み図



図で、図7(p.7)は、この照明器具にフォーカスされた舞台面を描いたものです。

図7でわかるように、このベースライトは矩形ではなく、いわゆるアメンバー模様のゴボパターンを使った明かりで、アクティングエリアを分割しています。

このように、アクティングエリアを分割してオートフォローで見せる明かりにも、矩形に分割するだけでなく、円形の明かりで分割したり、ゴボパターンを使った変形の明かりで分割するなど、明かりのデザインの方法はいくつも考えられます。

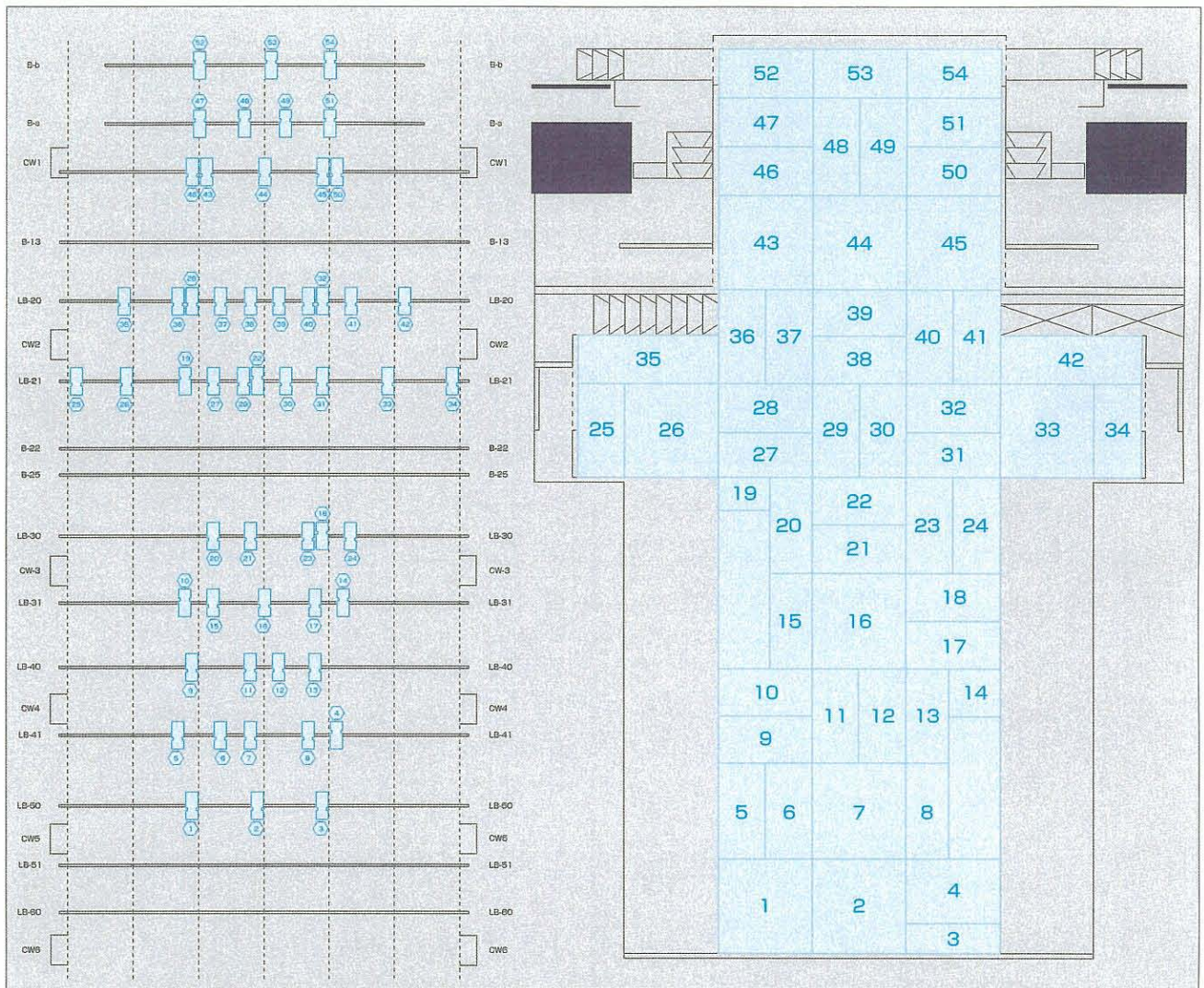
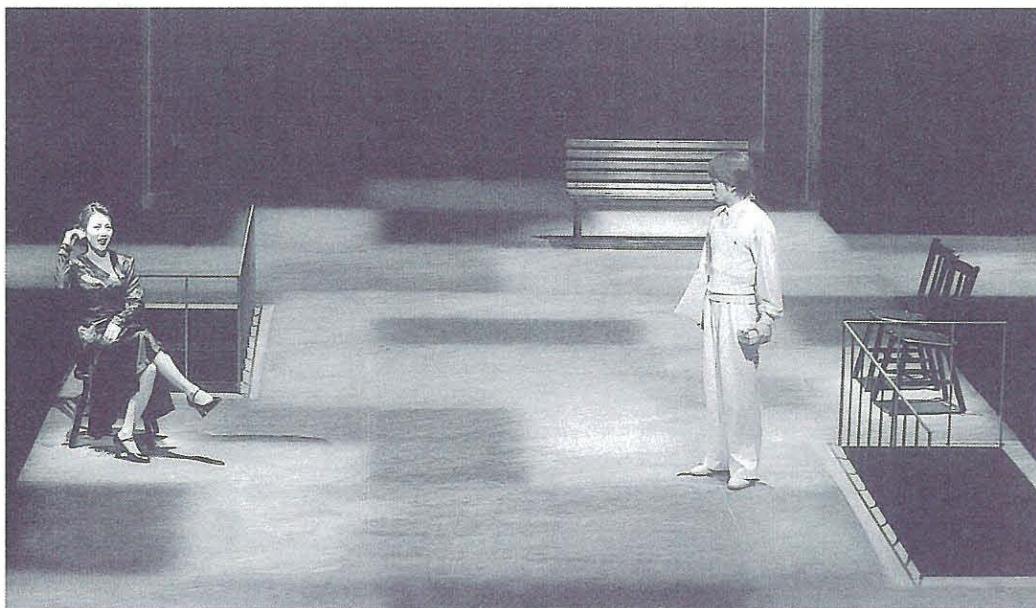


図4 ベースライトのために仕込まれた照明器具

図5 矩形にフォーカスされたベースライト



【写真11】

図4の仕込み図でつくられたベースライトを使ったシーン。

54の矩形に分割されたベースライトは、俳優の動きや立ち位置に合わせて、明るくなり、その位置を離れると暗くなる。

この明かりの動きをプランするためには、稽古の段階から俳優の動きを正確に把握しておくが必要になる。

(写真撮影/青木 司)



舞台上で演じられる芝居の内容や、演出家がどう舞台を見せたいのかといった、さまざまな要素によってベースライトのつくり方が選択されるわけですが、シャープに矩形に分割した明かりと、もやもやとしたゴボパターンで分割した明かりのふたつの例を見

ても、そこから生まれる雰囲気や空間の空気が異なってくることは想像できると思います。

ベースライトを分割してつくるオートフォローの技法には、分割の仕方によって、舞台空間に多様な空気をつくりだすことができる面白さがあるのです。

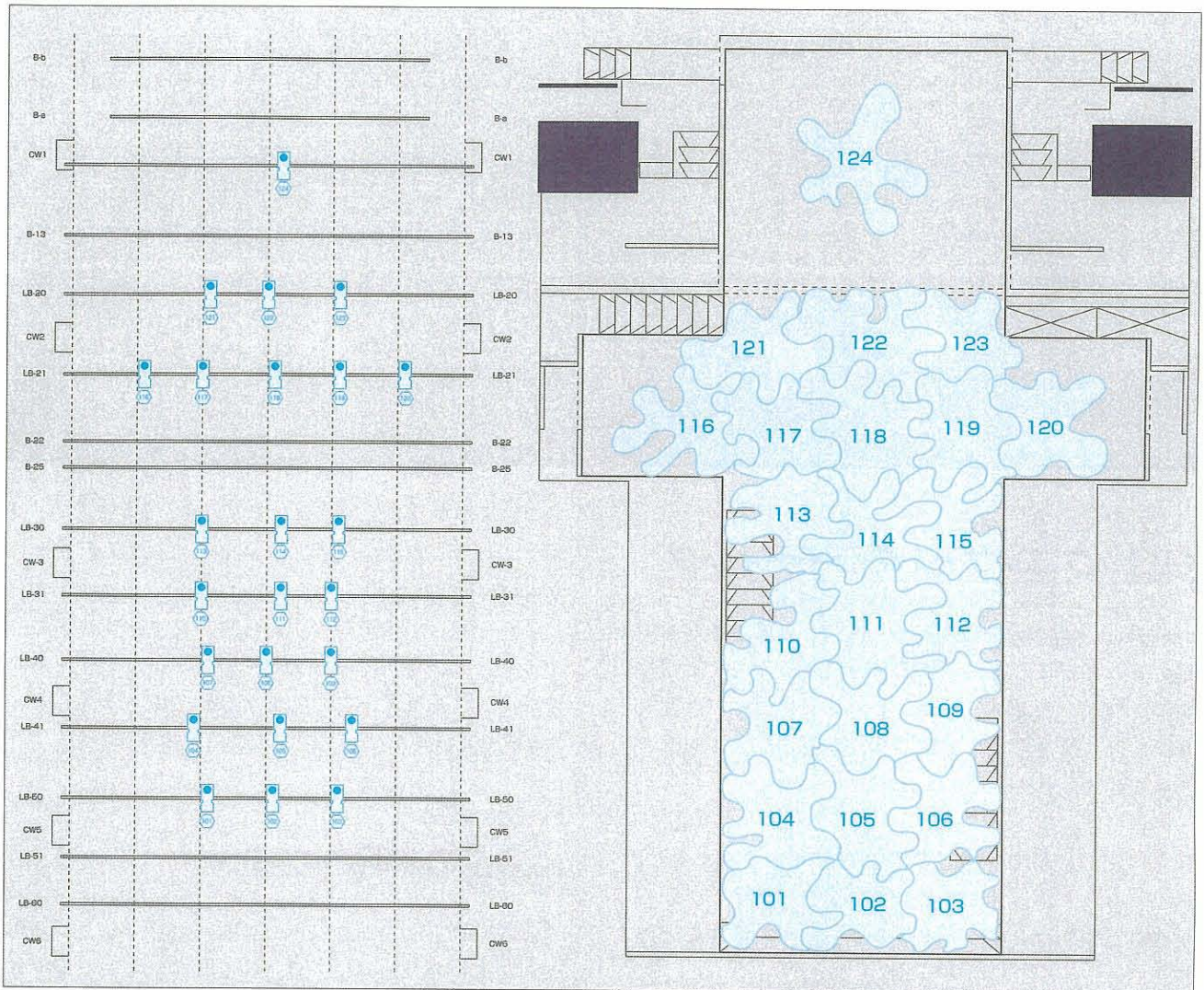


図6 ゴボを使ったベースライトのために仕込まれた照明器具

図7 ゴボのアメーバー模様で分割されたベースライト



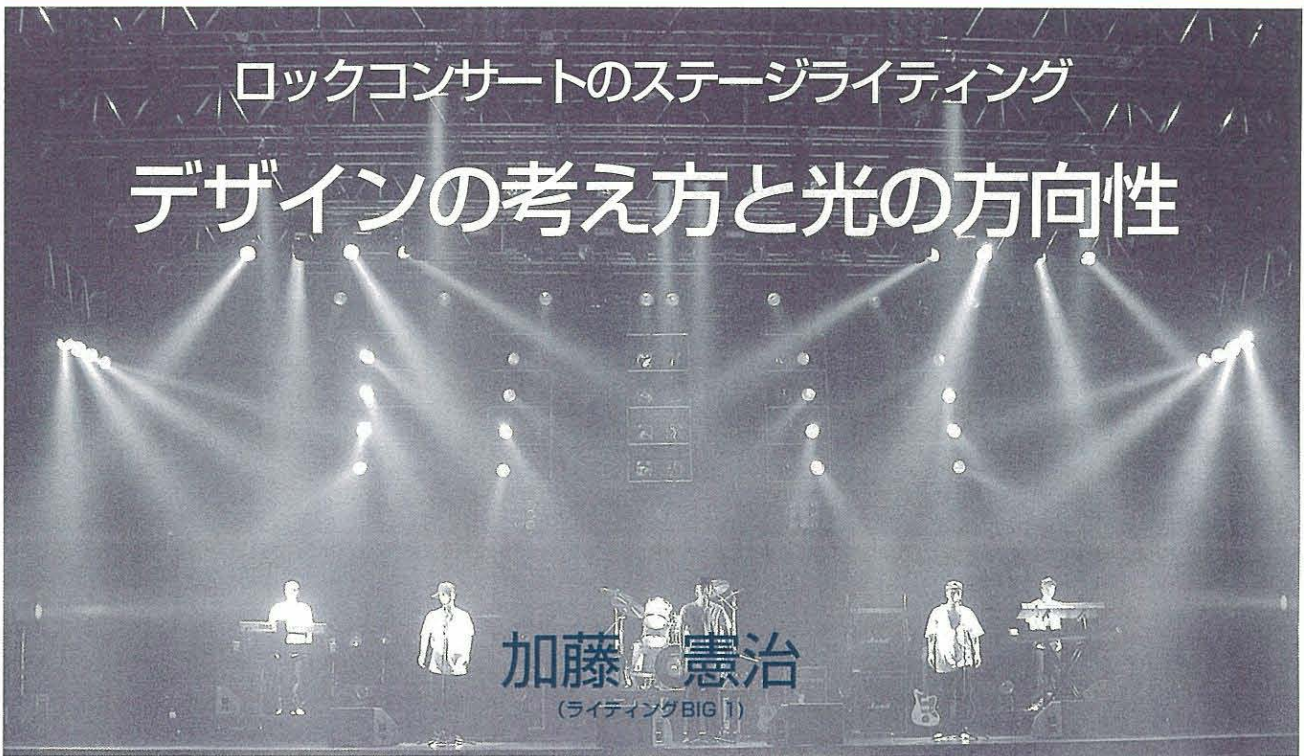
【写真2】

図6の仕込み図によってつくられたベースライトを使ったシーン。アメーバー状のゴボによって分割されたベースライトは、矩形のベースライトと同じように、俳優の動きや立ち位置によって、明るくなったり、暗くなったりするが、舞台空間の雰囲気が矩形のベースライトと異なって表現される。

(写真撮影/青木 司)



# ロックコンサートのステージライティング デザインの考え方と光の方向性



## ロックコンサートのライティング

p 従来、演劇の舞台照明については、さまざまな形で紹介されてきましたが、私たちが取り組んでいるロックコンサートのステージライティングについて、明かりづくりに対する考え方や具体的な技法などが紹介される機会はあまりなかったように思います。

近年では、ロックコンサートのライティングを見て、舞台照明の仕事に志す若い人たちも増えていますし、また、ロックコンサートのステージライティングから生まれた照明器具やライティング技法が、演劇などの舞台上で使われることも少なくありません。

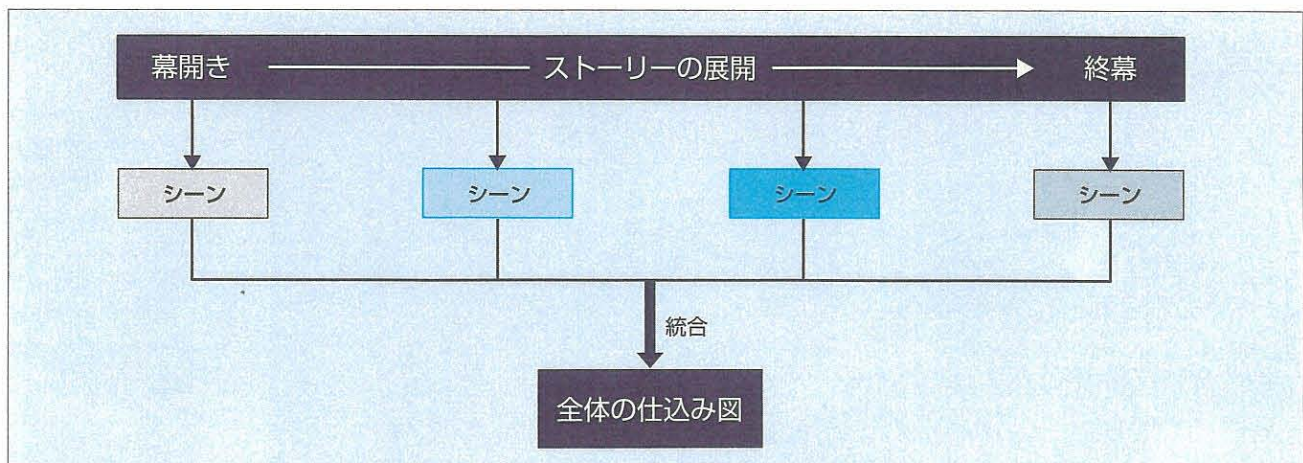
そこで、ロックコンサートのステージライティング

についてわかりやすく紹介してみたいと思い、『ロックコンサートのためのステージライティング入門』という書籍の形でまとめてみました。

ここでは、この書籍の中からロックコンサートのライティングについての考え方や、ロックコンサートのステージライティングの特徴のひとつである光のビームを見せるライティング技法について紹介します。

## 演劇の照明との違い

演劇とロックコンサートのステージライティングの大きな違いのひとつに、最終的なライティングデザインができあがるまでの仕事の進め方があります。



【図1】演劇の舞台照明では、ストーリーの展開に合わせて1シーンずつ必要な明かりをつくり、それらのシーンの明かりを統合して整理し、最終的な1枚の照明仕込み図にまとめていきます。



演劇の舞台では、台本を基に舞台美術家が舞台装置をデザインし、ストーリーに沿っていくつもの場面が作られていきます。

舞台照明の仕事は、幕開きの場面の明かりから、終幕の最後の場面の明かりまで、ストーリーの流れや場面の变化に合わせて、1シーンずつ必要なシーンをつくっていきます。

それぞれのシーンは、演出家の演出意図やイメージに基づきながら、俳優の演技を見せる明かりや、舞台装置を見せる明かり、場面全体の情景を表現する明かりなどによって構成されますが、このたくさんのシーンを統合してまとめていき、最終的に1枚の照明仕込み図をつくりあげます。〔図1 (p.8) 参照〕

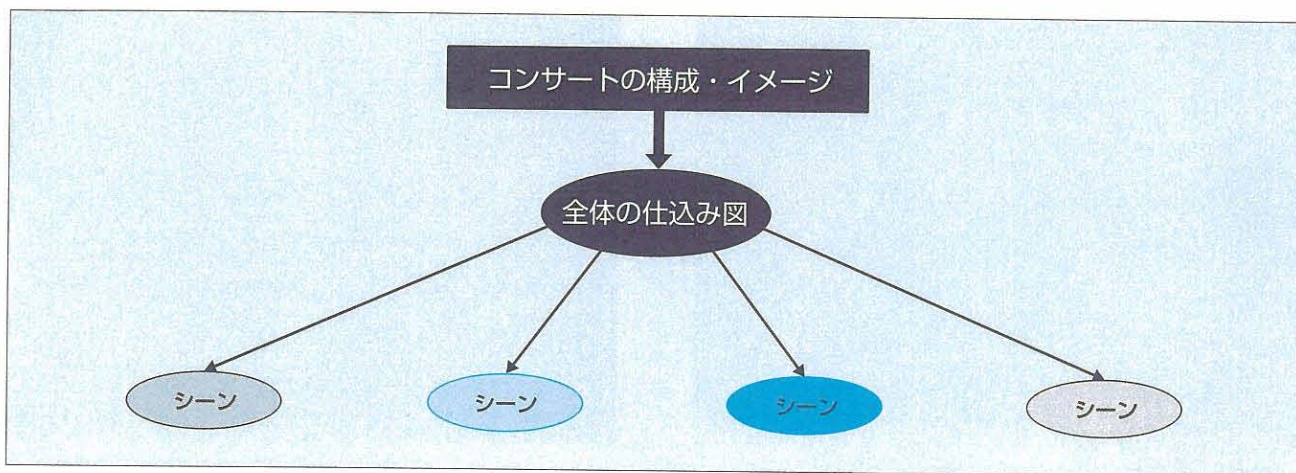
つまり、1シーンごとの明かりを積み重ねることによって、全体の照明仕込み図が作成されていくのです。

これに対して、ロックコンサートでのライティングデザイナーの仕事は、最初にコンサート全体の構成やイメージに基づいて、ライティング表現の全体像をデザインすることからスタートします。

使用する照明器具やカラーフィルターの色を選択し、その配置を考え、それらの器具をどう使うのか、明かりの点灯の仕方なども計算しながら、イメージしているライティングが実現できるような照明仕込み図を作成していきます。

もちろん、表現したいシーンもいくつか考えてはいますが、ここでは全体のライティングイメージを中心に据えて、このイメージの大きな枠組みのなかでさまざまなシーンをつくることのできるような照明仕込み図を考えていきます。

演奏される曲目や曲順などのコンサートの細部が決



〔図2〕ロックコンサートでは、コンサートの構成やイメージに基づいたライティングデザインが表現できるような照明仕込み図を最初に作成し、演奏される曲目や曲順に合わせてシーンや明かりの変化をつくっていきます。

## ロックコンサートのための ステージライティング入門

加藤憲治 著

### 目次内容 (一部)

#### 1 コンサートライティングの特徴

コンサートと演劇の舞台照明/コンサートライティングの変遷

#### 2 照明器具と周辺機器

パーライト/プロファイルスポットライト/フォロースポットライト/ストロボ/スピナー/サーチライト/ブラックライト/効果器具/スモークマシン/特殊効果器/電飾・映像

#### 3 光の方向による表現

バックライト/サイドライト/トップライト/ステージスポットライト/フットライト/バックフットライト/フロントサイドライト/シーリングライト

#### 4 光のコントロールによる表現

スイッチイン (パンフィン) /フェードイン/ブラックアウト/オーバーラップ (クロスフェード) /クイックチェンジ (カットチェンジ) /テイス

#### 5 ライティングシステムと調光操作卓

ライティングシステムの基本/プリセットフェーダー調光操作卓/メモリー調光操作卓/メモリー調光操作卓の機能/仮設のためのライティングシステム

#### 6 光の色による表現

光の色の選択/カラーチェンジャー/光の色による表現の技法/光の色の組み合わせと変化

#### 7 ムービングライトシステム

ムービングライトの種類/ムービングライトの構造と明かりの特徴/ムービングライトの光源/ムービングライトの動きの特徴/ムービングライトのカラーの機能

#### 8 ライティングデザインと仕込み図

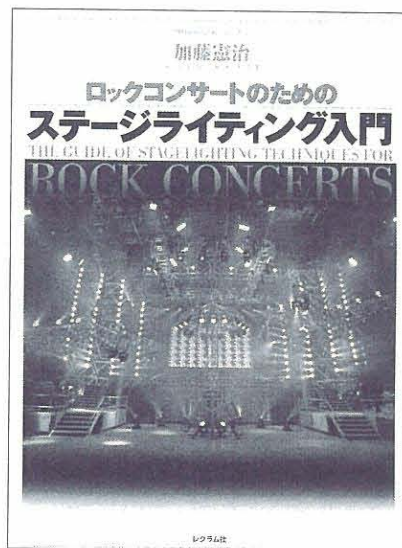
ステージのセッティング/照明仕込み図とフェーダー表の作成/仕込みのリエーション

#### 9 ライティングデザインの仕上げ

コンサートの構成とライティング/音楽の構成と明かりのCUE/プランニングとデータ作成の実例/ムービングライトを使ったデザイン/プログラミングから本番へ

#### 10 ライティングデザインの実例

日本劇場での最後の『ウエスタンカーニバル』/沢田研二 新巻コンサート/STALINコンサート/A LONG VACATION コンサート/RAY CHARLES JAPAN TOUR 1989



◎B5判 304ページ

◎定価 本体3500円(税別)

◎発行 レクラム社

<http://www.reclam.co.jp>



定すると、この照明仕込み図を基に、それぞれの曲目に対するシーンや明かりの変化をつくっていくこととなります。〔図2 (p.9)参照〕

コンサートライティングでのこうした明かりのつくり方は、演劇の場合とは全く逆の発想、作業手順であり、ライティングデザインにアプローチする際の大きな違いだといえます。



## ビームと光の方向性

ロックコンサートや演劇などのジャンルに関わらず、舞台照明の重要な要素のひとつとしてあげられるのが

光の方向性です。

演劇などでは、舞台上の人物またはオブジェに対してどの方向から光を当てるかによってその舞台全体の表情をつくります。特に、写実的な装置が組まれた演劇の舞台では、そのシーンの情景をリアルに表現するために、季節や天候、時間の経過などを考え、それにふさわしい光の方向性が選ばれ、人物や装置に光が当てられ、舞台照明がつけられています。

そうした明かりづくりに比べると、ロックコンサートのステージライティングでは、スモークマシンを併用してビームを使った光の表現を多用することから、光の方向性についての考え方がより多様なものになってきています。

バックライト



バックライトは、ステージ奥のライトバトンに照明器具を設置して、後方上部からステージ前方に光を当てる手法です。ステージ全体の雰囲気をつくったり、人物をシルエットで見せたりすることができます。

トップライト



トップライトは、ステージの人物などに上から光を当て、その人物を明るくピックアップさせる時に使われる手法です。演劇の舞台では、回想シーンや一人の人物の演技に観客の視線を集中させたい場面で使われます。

サイドライト



サイドライトは、ステージの両サイドの袖に設置されたタワーやラダーに、スポットライトをセットして、両サイドの上部からの明かりで人物や空間を明るく見せる手法です。人物やセットに陰影がついて、立体的に見せることができます。

サイドライト (片明かり)



サイドライトのバリエーションのひとつで、片方だけのサイドライトで人物やステージに明かりを当てる「片明かり」という手法です。光の当たっていない面には深い影が生じ、重厚な雰囲気やドラマチックなイメージをつくることができます。



これまで、舞台照明では舞台上の人物や装置に対して、バック、サイド、トップ、フロントの4つの光の方向性をベースに考え、それぞれの光の色、光の当て方、光量をコントロールすることで被写体をどのように見せるかを考えていました。ロックコンサートでも、掲載した写真のように、同じような考え方で光の方向性を考えていきますが、それに加えてビームをより効果的にみせるための光の方向性が重要になってきます。

従来考えられていた舞台の人物や装置などを見せるための光だけではなく、空間に飛ばした光のビームを構成することで、空間全体をデザインしていくという手法が用いられているため、人物や装置を明るくするための光の方向性とは別に、ビームのための光の方向

性を考えることが重要な要素になっているのです。

こうした手法は、特にステージから観客に向う方向性をもった光が効果的で、バックライトやバックフットライトなどのようなステージの奥の方から、客席に向けての光が効果的に使われるなど、ライティングデザインのベースが、これまでとは違った光の方向性を中心に組み立てられることもあります。

ロックコンサートでは、光の方向性だけでなく、光の色の選び方や使い方などにも、独自の考え方や技法が用いられています。『ロックコンサートのためのステージライティング入門』を通して、そうした技法の数々を理解していただき、明かりづくりの参考にしていただければと思います。



ステージスポットライトは、ステージの上手や下手の袖幕の内側にスタンドやベースを使ってセットしたスポットライトで、サイドから人物などに光を当てる手法です。人物がステージ空間に浮いているような効果を出すことができます。



フットライトは、歌舞伎や日本舞踊、ダンスなどの舞台では、衣裳や人物の表情を明るく見せるための重要な明かりです。コンサートでは、人物やセットの影をバックの horizont に映し出すといった効果を得るためにも使われます。



バックフットライトは、バックライトとフットライトの効果を合わせた手法です。ステージ奥に、スタンドやベースを使って照明器具を置き、人物のシルエットが見えるように光を当て、ドラマチックなライティング効果をつくります。



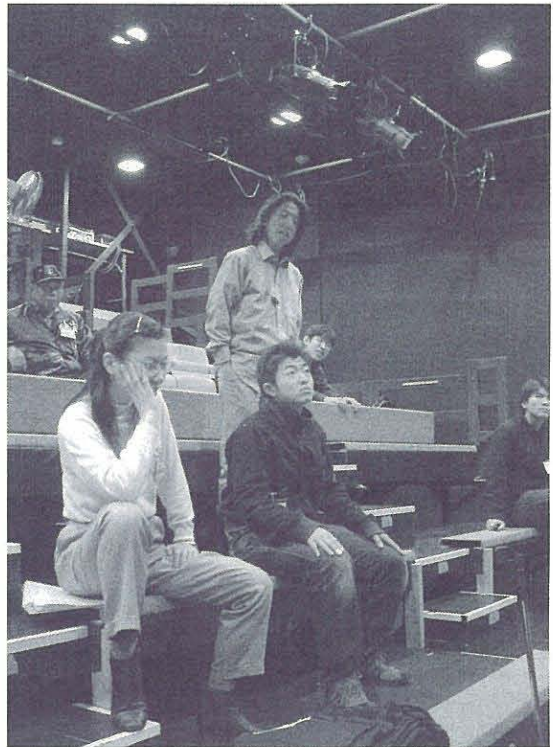
フロントサイドライトとシーリングライトは「前明かり」と呼ばれるように、客席側の壁面（フロントサイドライト）や、天井部（シーリングライト）に設置された照明器具によって、ステージを前方から明るく見せるために使用されます。



# せんだい演劇工房 10-BOX

宮城県仙台市若林区卸町2-12-9

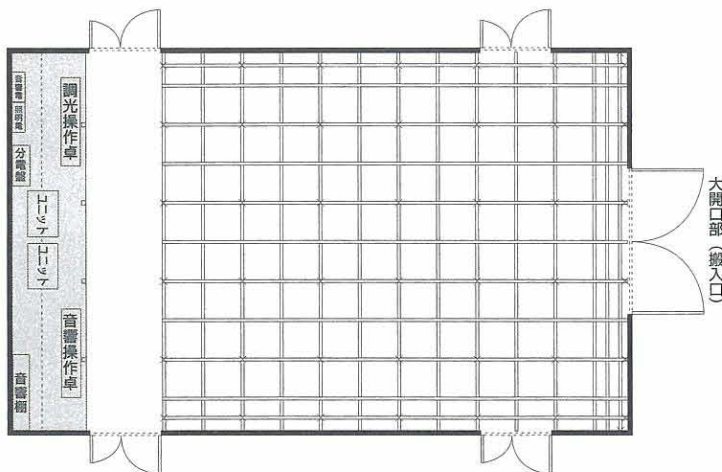
“試しながらじっくり演劇を創る空間”をコンセプトに掲げ、2002年6月、宮城県仙台市にオープンした「せんだい演劇工房 10-BOX」。舞台照明設備や音響設備を備えたbox-1を中心に、練習室や作業場・工房、制作室、資料室など10部屋のBOXで構成されたこの施設では、ワークショップや作品の上演をかさねながら、地域の人々に演劇創造の楽しさを広め、生活の中に演劇を根づかせるために、意欲的な試みが続けられています。なかでも、2004年度「10-BOX演劇道場」のタイトルで催されたワークショップでは、初心者を対象にした「白帯コース」と、深く演劇について学びたい人のための「黒帯コース」が企画され、実践的でユニークな活動が展開されました。まず、「白帯コース」では劇団を旗揚げし、試行錯誤しながら作品を上演するまでの過程を通して舞台づくりのノウハウを学び、「黒帯コース」では、第一線で活躍する演出家や舞台美術家、舞台照明家、舞台音響家、舞台衣裳デザイナーを招いた集中講座を開催し、経験豊かなプロのスタッフたちによって、舞台芸術の奥深さと刺激に満ちた創造への具体的なプロセスが紹介されました。演劇創造のためのワークショップという、その成果を数値などで計ることが難しく、ステップアップを伴いながら持続させていくことの困難な試みに正面から取り組む「せんだい演劇工房 10-BOX」。その粘り強く、情熱あふれる活動に大きな期待が寄せられています。



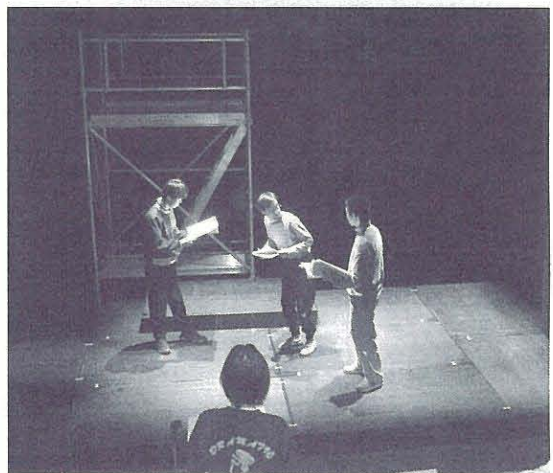
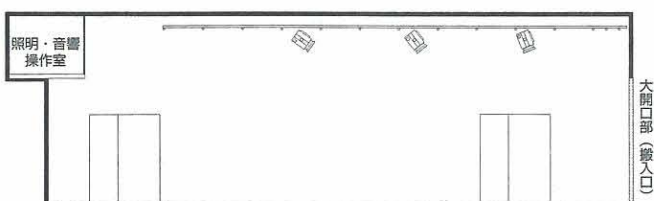
box-1の空間に客席を組んでおこなわれたワークショップ

## box-1 平面図

box-1の天井部にはボタンが格子状に設備されていて、スポットライトの吊り位置を自由に選ぶことができます。また、大開口部は搬入口として利用されます。



## box-1 断面図



舞台を設定してのワークショップ

## box-1の舞台照明設備

- |                        |                   |
|------------------------|-------------------|
| ●設備容量 1φ3W 300A        | ●負荷設備             |
| ●調光設備                  | DF型500W 32台       |
| 照明操作卓 (Lighting Board) | CSQ型500W 16台      |
| プリセットフェーダ 48本×3段       | ソースフォー750W 50° 6台 |
| グループフェーダー 6本           | ソースフォー750W 36° 6台 |
| 調光ユニット (ゼムツアー)         | UHQ型100W12灯3回路 4台 |
| 調光回路 C20A 48回路         | LHQ型100W12灯3回路 4台 |
| 直回路 C20A 4回路           | CT型60W4灯2回路 1台    |

## MARUMO LIGHTING NEWS

●「マルモ・ライティング・ニュース」は、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は丸茂電機株式会社まで申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。